

生きること、働くこと

校長 佐久間 敦子

「何故働くのか」と聞かれたら、迷わず「生きるため」と答えます。じゃあ「何故生きるのか」と聞かれたら、それもすかさず「生まれてきたから」と答えようと思います。

私は父からは「働かざる者食うべからず」「知恵のある者は知恵を、体力のある者は体力を、財力のある者は財力を世の中のために使え」と教えられ、母からは「栄養・休養・教養は人生の三養」と言われ、どんなに貧しくとも家族の食事と睡眠、人間としての品格を保つための教養を身につける工夫を教え込まれました。

生徒の皆さんには、この話はピンとこないかも知れませんが、私にはとても説得力のある言葉です。両親はとても裕福な家庭に育ち、何不自由ない暮らしが保証される環境で結婚し子育てをしていましたが、戦争と疎開によりやがて極貧という状況に追い込まれました。莫大な所有地であった農地は当然のことですが、それまでの小作人に開放されました。民主主義の社会では当然のことです。

両親は初めは家財道具や着物などの財産の売却でやりくりできましたが、働かなければ生きていくこと、まして小さな子供を養うことはできません。苦境に追い込まれて初めて「自立」したのかもしれない。方言を知らない東京者＝よそ者としての母には、排他的な農村部の、やっかみも入ったいじめや差別に立ち向かって生きていく知恵が必要でした。父は地域の中での地位があり、貧しくなってもまだ多少は保てており、実際の経済の貧窮を実感してはいなかったようです。

苦境からの脱却には、知恵と周囲の人との関係が必要でした。料理や裁縫、医学や文学、様々な教養を活かし、人々の悩みや要求に応えることで母はよそ者の扱いから地域に根付く人材になりました。ある時は行商、ある時は家政婦、苦勞知らずの母が頑張れたのは子どもの幸せを第一に考えたからです。父は農芸化学を学び、技師でもありました。いくつかの外国語を理解していたので、それなりの仕事があったようですが、結核を患って入院している姿しか印象がありません。私は、こうした経済的な落差の激しい境遇を味わった両親から、働くこと、何があっても強く生き抜くこと、子どもの幸せのために精一杯働く両親の姿を学びました。私も、そのような親でありたい、そのような人間でありたいと努力しています。

生徒の皆さんに、心から伝えたいことがあります。人間はたとえ一人でも、力強く生きていくために賢くなりましょう。汗水流して働きましょう。周囲の人とわかりあえる関係を作りましょう。そのためには、どんな自分であっても、まず自分がその自分を愛しましょう。そして自分につながる人を大切にしましょう。

「恒産なくして恒心なし」、自立した、まっとうな大人になりましょう。社会保険に加入し、福利厚生のあるしっかりした仕事に就くことが、人間としてのあたりまえの幸せの第一歩です。将来の自立した職業人として努力できるよう、今やるべきことをやりましょう。このしおりが、また私たち教職員があなたの助けとなれることを願っています。